

第二十一卷 第一號

(通卷第八十一號) 昭和十一年一月發行

研 究

『アルント漂浪記』の史料的價值

時野谷 常三郎

一、序……二、アルントの政治思想と漂浪記の特質……三、漂浪記から見た『ドイツ軍團組織とアルント、並にタウロツゲン協約締結の真相……四、漂浪記から見たスタインの對イギリス、スウエーデン政策とアルントの功勞……五、漂浪記から見たスタイン、アルントのロシア滯留とその同國に及ぼせる影響……六、結び。

一 序

エルンスト・モーリッツ・アルシト(Arnold, Ernst Moritz)は彼の「ヨーロッパ解放戦役」前後、いはゆる

『アルント漂浪記』の史料的價值

第二十一卷 第一號

一

「ドイツ統一論者」として縦横の活躍を演じ、流石の佛帝ナポレオン一世をして一敗地に塗れて立つ能はざるに至らしめた雄傑の一人である。

アルントの著『漂浪記』その原名を録すれば、*Meine Wanderungen und Wandlungen mit dem Reichsfeldherrn Heinrich Karl Friedrich von Stein* であるが、これは一八五八年彼の死歿の前、二年に出たもので、いはゆる解放戰役前、プロシアを追はれてロシア放浪の途に上れるフォン・スタイン男に伴ひ、親しく東歐にて體驗し、且つ仔細に見聞せるところを、アルント自ら後年、日次を追はず舊誌に參し、記憶に徴し採録せるもの、換言すればアルントその人の覺書^②即ち*Memoire*と稱すべきものであつて、自叙傳の一種である。

この自叙傳或は覺書なるものは個人の過去の歴史について最も正確なるところを傳へるやうに思はれ、しかも實は然か斷言するに甚だ困難な性質を伴つてゐる。如何に虚心坦懷の態度を以つて、如何に詳密に叙述し得たと信じて、そが果して眞にその人の過去の『歴史』を傳へるや否やは疑問であり、記憶に於て萬全ならざるものあるは勿論、時に偏見に左右されて思はずも事實を歪曲するやうなことにもなる。なほ叙述の當時は、平板な個々の事物の序列はあつても全體的統一をもつた過去の世界としては現はれない。

併し、相繼起せる種々の事相の最も詳密な、しかも或る場合最も正確なる叙述はこれを自叙傳に求

めねばならず、しかも年處を經過すること久しく、自叙傳の記述するところが、記憶を超えた客觀的世界として現はれ、過去の時代の種々の史實の有する諸傾向と相依り相俟つて、一つに中心に集まりこゝに渾然たる統一を形づくるに至らば、自叙傳の効果は極めて完全なるものがあるのである。

今は、既に客觀的時代に入れるアルント漂浪記に現はれた個々の史實を吟味し、如上の統一體を形づくるに於て乖離するところはなきや、即ち史實の歪曲され、また誤まり傳へられたところはなきやこれらに就て充分な考密を試みやうとする。

さてこれらの研究に入るに先だちアルントの政治思想の果して如何なるものなるやを叙し、漂浪記の完成されるに至つた次第を述べ、良がて漂浪記の傳へるところの果して眞を得たるものなるやを知るの一助たらしめやうと考へる。

(註)

① E. M. Arndt: *Meine Wanderungen und Wandlungen mit dem Reichsfreiherrn Heinrich Karl Friedrich von Stein*. Berlin. 1858. (mit Einleitung von Verfasser.)

② W. Bauer: *Einführung in das Studium der Geschichte*. S. 275.

二 アルントの政治思想と漂浪記の特質

エルンスト・モーリッツ・アルントは一七六九年、當時のスウェーデン領(バルト海の大島でホメ)リネーゲン島南岸に近きシュリッツ(Schritz)に生れ、八人の兄弟姉妹の中の第二男であつて、一八六〇年、普墺戰

役の六年前に九十一歳の高齢を以て世を辭するに至つた。彼の家系を按ずるにその祖先はスウェーデンに出た或る下級官吏であつて、彼の父なる人はもと奴隸生活を營んでゐたが、プトプス伯爵 (Graf Putbus) の恩惠によつて、かゝる悲惨の境遇を解放され、シヨリツツなる農園の監理者に擧げられた。

またアルントの母といふのはフレデリケ・ウィルヘルミネ (Frederike Wilhelmine) なる一靴工の娘であつて、比較的教養のあつた婦人と見え、アルントの父共々ツンゼウイッツ (Dunsewitz) に移り住んで、小作農業に辛くも生計を營んだ際、僅か六歳の小兒なるアルントは母自身から種々な訓育を受けたと云はれてゐる。兎まれアルントの両親といふのは極めて微賤なる階級に屬し、その父の如きいはゆる奴隸生活から人の情なまよによつて引立てられたやうな次第であり、アルント自身、如何に自由の尊むべきものであるかに人一倍、痛切なる感銘を有し、殊に十八世紀以降隆盛に趣ける自由主義リベラリスムの感化を受け愈、該方面に充分なる同情を持つたやうに思はれる。事情かくの如くであつて、アルントは後年「リューゲン、ボメラニアに於ける奴隸制度史の研究」(Versuch einer Geschichte der Leibeigenschaft im Pommern und Rügen)なる一篇をもつし、これが凱切なる記述によつてスウェーデンの貴族に恐慌を捲き起し、更にスウェーデン王グスタフ四世の如きこの書を讀んで悲惨なる農奴の實情を知り、早急これが廢止を斷行するに至つたと云はれてゐる。

さてアルントは齡長じて十一歳、その両親に伴はれてリューゲン島を出で、一葦帯水の海峽を涉つ

て、當時猶ほスウェーデンの領域であつた前ボメラニアの西北海岸ストラルズンド(Stralsund)に住居を卜し、従前通り小作人の子として貧しき生活を續けたのであるが、今や全然ドイツ的なるこの地方に住し、日夕周圍に語られるドイツ語の語調に慣れ、美^②はしき北獨海岸の海景色を賞で、また海岸に營まれた古色蒼然たるドイツ人の墳墓に頷^③づき、或は民間に語り傳へたドイツ的傳説にその耳を悞ませ、次第にドイツ國民性に一種の愛着を感じ、スウェーデン人なる彼自身も純然たるドイツ人の如くに思惟し、人も亦彼を目するに純乎たるドイツ人を以てするに至つた。

即ち輓今の「科學的郷土學」に郷土とは必しもその人の出生地のみを指すのではなく、人がある土地の持つてゐる精神的、自然的なるものと内面的に結合した時、その土地はその人に對して郷土となると説いてゐるが、アルントの場合は、かゝる意味に於てドイツが彼れの郷土となつたのである。勿論併し乍らスウェーデン人もドイツ人も、同じくチュートン系に屬する類似の民族——類似の言葉を話す——であつたと云ふことがアルントをして容易くかゝる傾向を帯びしめるに至つた譯であらう。

アルントの政治思想を特色づけるドイツ民族愛、換言せばドイツ民族統一主義も時代の思潮たる浪漫主義に影響を受けたのは無論であるが、上述ぶる如き彼の環境の薰化に依ることも多大であらう。

アルントはかゝる環境に人と爲り、また眞面目な峻嚴な、敬虔な、勞力的な田舎家族の生活に養はれ、摯實剛健の氣質は自づと涵養され來るに至つた。一七八七年にはストラルズンドの專修學校に學び、

更に同じ前ホメラニア、グライフスワルド (Greifswald) 大學に神學を習ひ、またドイツのイエナ大學^③に至つて益々斯學の研究に精進したが、神學の研究は彼の性質を冷やかにし、しかも此の間に親炙せるフィヒテの學説は彼の進路に一道の光明を點じ、フィヒテその人に對し、畏敬の念を以てこれを迎へるに至つた。

アルントは大學を出でて一時宗教的生活に入いつたが、その後之に遠かつて放浪生活に入り、オーストリアからホンガリアに出で、イタリア、フランスを歴遊して、ベルギーに出で、ライン河を溯つてドイツを横ざり、己が故郷の地とも云ふべきストラルズンドに還つた。その間、自然の妙味を噉し、諸邦國の歴史と民情を探り、茲に政治記者として名譽ある地位を獲得した。

一八〇三年彼はスウェーデン本國に旅行を試み、有名なる「スウェーデン旅行記」(Reise nach Schweden) を著はして、文名一時に現はれるに至つたが、この前後彼の詞藻は著しく煥發され、一八〇四年にはドイツのロストックで、その詩集を公にし、ついでホメラニアのグライフスワルドで『鵜コウソツルとその家族』なる三幕もの、悲劇を公にし、空想的な浪漫主義者と、想像に富む哲學者の爲め、計らずも尊むべき小作人の家庭に將來された不幸事を物語り、劇中躍動する人物は何れも皆、鳥類として描寫せられてゐる。

この頃、フランス帝ナポレオン一世の勢力は突如、慧星の如く中外に輝き、忽にしてオーストリア

の抵抗を斥け、忽にしてまたプロシアの存在を危ふするに至つた。こゝにアルントは蹶然腹想的の沈潜を離れて、歐洲全局の運命を患へ、政治的工作に一生の心血を傾倒せんとするに至つた。

當時ドイツ人にしてアルントその人の如く独自の見解からフランス國民を考察せるものは無つた。又獨人にしてアルントその人の如く正當適切にナポレオンの心裡に潜む抑壓的反獨思想を鑑識せるものは無つた。今やアルントは細心の注意を以てドイツ民族の自覺を固め、ドイツ民族の生活を高調して、極度に反佛精神を鼓吹し、一時、洛陽の紙價を貴からしめた彼の名著『時代精神』(«Geist der Zeits»)の如き、この間の消息を窺知せしめるに充分なものがある。

さてこゝに注意せねばならぬのは、アルントの懷抱せる自由主義的民族統一主義は果して如何なるものであつたかといふその事である。

アルントは先にも云へるやうそのイエナに遊べる際、親しく大哲フイヒテの講筵にも侍したやう考察され、彼のいはゆる民族主義はフイヒテの夫れに負ふところ可なりに大なるものがあつたやうに考へられる。

マイネツケの『世界市民と國民國家』(Friedrich Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat.)によるに、『フイヒテが一八〇四年「現代の特質」»Grundzügen des gegenwärtigen Zeitalters»を著して、いはゆる愛郷的愛國心に輕視の眼を向けたが、この一八〇四年の世界市民は事實一八〇七年に於ける「ド

イツ國民へ」*An die deutsche Nation*」の演説者であつた。ウインデルバンドも「ドイツ國民へ」の演説者の愛國主義(民族主義)が四海同胞主義に類するのは、雙生兒の一が他のものに類するに異ならぬ。云々といふてゐるが、實にフィヒテは愛國者であつて尙且つ四海同胞主義者である。何となれば凡ゆる民族的教養 *Nationalbildung* の最終の目的は、常にこの教養が人類全般の上に擴張せられる性質を有するからである。『云々といふやうな意味を述べてゐる。畢竟するに一箇の民族的教養はこれを推し擴げて遍ねく人類全般の上のうち及ばし、努めて他國民との協調、融和を計らんとするところにその意義を有するといふのである。

しかしアルントの唱ふる「他國民との協調」はフィヒテのいふがやう極めて廣汎な漠然たるものは無く、その間自ら一定の限度があるやうに思はれる。

同じマイネッケの著述を見ると、『三人の愛國者、グナイゼナウ (*Graeser*)、スタイン並にアルントの依つて以て立ちしところの政治地盤は殆ど同一であつた』と説き、しかも、かゝる共通な政治的地盤といふのは自由主義的圈内の諸國を連ねて非自由主義的圈内の他列國に當らうといふのであり、こゝに所謂、自由主義的諸國とは、ロシアを始めその他のドイツ諸國家、將たこれに關連を有するドイツ系諸國家といふ意味であり、また非自由主義的國家とは歐洲の暴君と云はれたナポレオン一世の統治にかゝるフランス並にその與國たるの意義を明かにしてゐる。なほマイネッケはこの自由及び非自由的

國家の對立を「二元主義」(Dualismus)^⑦と呼んでゐる。顧ふにナポレオンは世界的人道主義によつて民族性の價値を無視し、歐洲の武力的併呑を企て、その反動は、歐洲諸方面に民族的統一の氣運を助長し、こゝに民族主義對世界主義の抗爭對立を見るに至つた。

かくて彼れグナイゼナウはハノーヴァー及びプロシアなる自由的ドイツ諸國家を連れ、これに加ふるにドイツ系國家たる英國を以てし、以て非自由的なるナポレオンのフランスに反撃を企てた。またスタインも同じ二元主義の見地に依り、自由的諸國家の聯盟もて非自由なるフランスを抑制せんと企てしかも聯盟の中心は飽まで統制下に持來されたドイツ的勢力を以てし、なほこれが勢力の中心には久しくドイツの帝冠を支へたオーストリアのハプスブルグ家を充てねばならぬといふ方針であり、所謂『大ドイツ主義』に立脚するものがあつたやうに思はれる。勿論スタインはドイツ、ナッサウの生れであつて、永らく榮職をプロシアの官界に奉じてゐたので、オーストリア以上プロシアに親しみを重ねてゐたのは無論であり、のみならずプロシアの道徳力、精神力の優秀を認めゐる。隨て將來プロシアにして民族統合の中心たるに至らば斷然その方に傾くのは自然である。しかもこの際オーストリアを中に仰がうとしたのはオーストリアに對してプロシアの微弱なのを信じた爲であるまいか。

次にモーリッツ・アルントであるが、彼も同じく、二元主義の見地を執り、自由國家の聯盟で、暴壓極まるフランスの不法を是正しようと考えた。しかもこれが聯盟の中心は飽まで統一されたドイツ帝

國そのものに置かうといふのであり、アドルフ・ラップの『ドイツ思想』の中にも、アルントの思想を述べ「正にドイツは世界の中心にあつて諸國民間の媒介者たるべき天職を負はせられており、また文化發展の中心、精神文明の傳達者でもあるべきであるから、飽まで三重四重の防壁を築いてその統制を嚴にし、四方からの他文明の流入によつて、その特色を銷磨されるやうなことがあつてはならぬ。」(»Gerade weil die Deutschen in die Mitte des Weltreis gesetzt, zu Vermittlern unter den Völkern berufen sein, Mittelpunkt der Entwicklung und Aussender des Geistes sein sollen, müssen sie dreifache und vierfache Bollwerke um sich aufzuführen, um nicht durch Zufüsse von allen Seiten verwaschen zu werden.)^⑨と々と論じてゐる。

さてアルントはかゝるドイツの統一を計るに、プロシア中心の小ドイツ主義、オーストリア中心の大ドイツ主義その何れを執らんとしたものであらうか。勿論彼はスウェーデン系の出自をもつものではあるが、スウェーデン人は、ドイツ人と同じくチュートン系に所屬し、殊に彼れの幼時よりプロシア的ドイツ文化の浸潤せるリューゲン島將たポメラニアのストラルズンドに人と爲り、プロシアに親しみを感ずることは到底オーストリアの比でなく、出來うべくんばプロシアを首腦としての統一を希つたに相違ない。併し普の實力はオーストリアの夫れに及ばぬと信じたので、普は北ドイツに、^⑩ 奥は南ドイツに夫れを別箇の支配權を持ち、普奥兩國共力してフランスの防衛に當らせようと考へた。

然るに一七九五年フランス總裁政府の時代プロシアは敢へてフランスとバーゼルの和議を結び、自らライン地方を拋棄してポーランドに力を展べ、尋いで一八〇五年ナポレオン帝の威力に屈して、帝の進路を妨げざることを約したから、反佛的態度に終始せるアルントの憤懣は大に昂まり、プロシアを以てドイツ統一の大任に該當し得ざる國土なりと考へ、從來、多大の尊敬を傾倒しゐただけ、いよいよ痛烈に該國家を非難し、遂にプロシア王室の代表とも云ふべきフリードリヒ大王の佛國文化心酔が事遂にこゝに至らしめたものなりと非難した。しかしその後、プロシアの民族精神が高潮し、反ナポレオンの旗幟を掲げて勇ましく奮闘し、殊に率先して解放戦後の口火を切るに至つてからは一旦沈衰せるアルントのプロシア崇拜が再び擡頭し、プロシアはドイツの先頭に立つべきものである。と力説するに至つた。

兎に角以上述べ來れるやう、グナイゼナウと云へ、スタインと云へ、將たアルントと云へ何れも統一を完了せるドイツを以て中心に、自由的諸國家の聯盟を構成し、やがてこの勢力を以て反自由的なるナポレオンの勢力を一舉に打挫かうと考へた。この自由的諸國家の聯盟といふところにコスモポリタニック四海同胞的な特質が現はれおり、なほナポレオンの不法を除去されたフランス換言すれば正義に立脚せるフランスなら、敢へてこれとの提携をも辭するものでないやうに考へられる。かく考察し來ればアルント一派の政治思想には、フィヒテ一流の他民族との普遍的な協調融和の精神も、可なり明瞭に現はれてゐ

るやうに思はれる。

併し、理論的にいふて四海同胞的なアルント等の政治理念も、その骨子として、將たまたその神髓として、熱烈な民族的祖國愛換言せばマイネツケに云ふ『土地的な愛國心』(«der erdenhafte Patriotismus»)即ち特定の土塊、河川、山嶽に固執せる同じ言語を語る同一民族の愛國心そのものを高調した。そしてこの『土地的な愛國心』は彼のフィヒテの持たなかつたところであり、また持つを欲せなかつたところである。

即ちフィヒテの所謂愛國心は堅固な精神生活の領域を同うせる民族協同體を愛重せる謂ひであり、俗に云ふ國土以上のものを愛敬する譯合である。しかしアルントのそれは飽まで國土に即し、一定の土地に關係ある同一言語の同一民族が民族國家の必要な條件と考へてゐる。

事實ライン河の東西兩岸にドイツ人の住するに當り、若し西岸のものがその道德なり、宗教なり、世界觀なり將た科學藝術に於て、其他の大部のドイツ人、換言すればライン河以東のドイツ人に異なり、堅實にしかも確かでないやうな場合、フィヒテによれば西岸のものをドイツ民族以外のものと見做すかも知れぬ。しかしアルントは一定地域即ちライン河の東西に同じ言葉をもつ同じドイツ民族の生活してゐる状態に鑑み、同じくこれを同一國家に包容し民族國家を完成せんと努める。⑬⑭ラインはドイツの中を流れる河で國境ではない」といふたのもかゝる見解から説明することが出来るであらう。

民族國家の限界がかく一定民族に關係ある特定の地理に支配され居る以上、領土の限界は單なる山川河海の狀況によつて左右さるべきでなく、同じ言葉を話す同じ民族の擴がりによつて定むべしといふ議論が起る。勿論、實際的に云へば異なる言葉を話す同一民族もあるのであるが、アルントは言葉こそ民族國家の限界であると信じ、ドイツ語の話される極み(『Soweit die deutsche Zunge klingt』)ドイツ國であると唱へた。尙ほアルントの信するところ、『神』と『自由』は民族國家に不可缺の要素であると考へた。換言すれば神(Gott)、自由(Freiheit)、祖國(Vaterland)の三者は不可分離の實體なりと信するに至つた。

勿論アルントの祖國愛は熱烈な信念に出た關係上、祖國愛に結付くキリスト敎の神の理念も自づと舊約的傾向を有する。従てアルントの信するところ、ドイツ人自體、神によつて選ばれた所謂『選民』とも稱すべきものである。

熱火の如きアルントの祖國愛は彼の四海同胞的な特質あるにも係はらず、苟も主義主張に反せる他國民に絶大な憎惡の念を有する。アルントの云ふところ、余は實際、フランス人(ナポレオン治下の)に永く久しく憎しみを覺ゆる。この憎みこそドイツ民族の信仰として、また神聖な幻影として、凡ゆるドイツ人の心裡に灼やき、吾人をして終始われらの忠誠・正直・勇敢に固執せしめる。云々の語は這般の消息を表白して餘蘊無きに庶幾きものがある。

アルントは一八〇五年スウェーデン王に依つて大學教授の榮職に任せられようとしたが、これを辭し、却つてストラルズンドの官廳に奉仕し、スウェーデンの行政事情に盡瘁するところがあつた。併し或時、酒宴の席で、スウェーデンの官吏と争ひ、爲めに兩者は決闘を行つて、アルント自身が傷を受け暫らく病床に呻吟するに至つた。この折、スウェーデン官吏が酔に乗じてドイツ國民を侮辱し、それが爲めアルントの怒を買つたのであるといふのを見て、アルントその人の祖國愛が如何に熱烈であつたか、想像せられる。

さてその翌年の秋にナポレオンの率ゐる精銳がプロシアの中心を目懸けて侵入し、イエナ・アウエルシュタットの敗報が引續いて至るといふ有様で、元來が親普的傾向を有するアルントの失望は大に昂まり、海を涉つてスウェーデンの本土に脱れ、首府ストックホルムにあつて非常なる歡待を蒙り、その間瑞典法や政治的小冊子の獨譯に従事したが、このストックホルムの滞在三年といふものは、彼の一生に於て最も不幸なる期間であつた。何となればこの間彼はいはゞ異郷の如きスウェーデンに止まりその熱愛せる祖國プロシアの艱難を痛感し、ことにスウェーデンの上流がナポレオンを神格視することに多大な不滿を感じるに至つた。良がて一八〇七年普佛の間にチルジットの和議成り、フランス軍亦、プロシヤを去つて銳鋒を他に轉じたから、一八〇九年アルントはスウェーデン本土を去つて、ストラルズンドに歸り、その著すところの『時代精神』(Geist der Zeit)を遙にロンドンの地で公刊し、

その書中ナポレオンを痛罵し、ドイツ人を激勵し、『ドイツの統一は我が時代の信仰だ、そして吾人に於ける最高の宗教は男女の小兒を持つよりも寧ろ祖國をもつにある。殊にドイツ男子の最高の決意は正義及び眞理を守つて勝利を得るか、然らざればこれが爲に死を致すにある。』云々と論じた。

さて一八〇九年アルントはプロシアの首都ベルリンに出で、青年時代の昵近、ライメル書店主の許に身を寄せたが、このライメルの家は凡ゆる地方より集り來る小ドイツ主義者の會合所で、こゝに滞留せるアルントの親普主義は、同志の影響によつていよゝその熱烈を加へ、身も心も純乎たるプロシア的となつたのである。

この比、アルントはボメラニアスウェーデン領グライフスワルド大學の教授職にあつたが、時方にナポレオンの威力が西歐を風靡し、反佛主義に終始するアルントの安居を許さず、彼は一八一一年秋教授を辭し、翌年八月遙々露京ペテルブルグを訪ひ、折節ロシアに亡命しアレクサンドル一世の信任を蒙り、銳意『ドイツ軍團』(Die Deutsche Legion)の編成に努める、もとのプロシヤの大臣スタイン男の許に身を寄せ、その壯業に參畫することゝなつた。

かくてアルントはスタインの力強き背景を利用して、ロシアの上流社會に近づき、また同じロシアに亡命せるドイツ・スウェーデンの名士とも交はり、或はスタインの命を奉じて、對英對普等の外交にも努力し、彼れの精進せるナポレオン討滅の策は着々と進行し、こゝにナポレオンの隆運に最後の止

めを刺した解放戦役の展開を見ることゝなつた。今やスタイン・アルントの重大な責務は果され、兩者相伴ひて一八一三年一月ペテルブルクを去り、ナポレオンのロシア敗退を躡しつゝプロシアに向つた。

いはゆる『アルント漂浪記』は主として彼のロシア滞在間の體驗、見聞を日次を追はず採録せるものであつて、解放戦役前後に於ける東歐の狀勢を髣髴たらしめ、何故、同戦役の勃發するに至つたかを知らに、極めて恰好の資料である。殊にロシアに於けるアルントの活動は、亡命の偉人スタインの指導に基いて行はれたのでアルントの行動はそのまゝこれをスタインの夫れと見做すことも出来る。

上に精細に述べ來つたアルント一派の民族主義、換言せばその熱烈な民族的祖國愛、かゝる精神が如何に如實に漂浪記に描寫せられてゐるか、またこれらの記述が個々の史實の有する諸傾向と相俟つて渾然たる統一體を形成してゐるかどうか、若しこの統一にして失はれ居る場合、そは見聞記憶の不充分よりして起るか、將た故意の事實の歪曲に因するか、これらの關係につき逐次精細な考究を試みやうと考へる。しかし概してよく事の真相を傳へ史實の歪曲とは殆ど無く、アルントの極力排撃するナポレオンに對する評論の如きも、左まで辛辣に過ぐるやうには思はれぬ。

(註)

① Allgemeine Deutsche Biographie. 1. Bd. S. 541.

- ③ Dito. 1. Bd. S. 541.
 ④ Dito. 1. Bd. S. 541.
 ⑤ Dito. 1. Bd. S. 542 — »Der Storch und seine Familie,« eine Tragedie in 3. Aufzügen.
 ⑥ Friedrich Meinecke: Weltbürgertum und Nationalstaat. S. 91—S. 92.
 ⑦ Dito. S. 167.
 ⑧ Dito. S. 166.
 ⑨ F. Meinecke: Preussen und Deutschland. S. 5.
 ⑩ Adolf Rapp: Der deutsche Gedanke. S. 64.
 ⑪ Dito. S. 76.
 ⑫ Dito. S. 75.
 ⑬ Dito. S. 75.
 ⑭ F. Meinecke: Weltbürgertum u. Nationalstaat. S. 91.
 ⑮ Dito. S. 91.
 ⑯ H. Rose: The Life of Napoleon I. p. 373. Allgemeine Deutsche Biographie. 1. Bd. S. 544.
 ⑰ 民族性の本質と發見 三頁(日獨文化協會發行)
 ⑱ Adolf Rapp: Der Deutsche Gedanke. S. 55.
 ⑲ Dito. S. 61—S. 62.
 ⑳ Dito. S. 67.
 ㉑ Allgemeine Deutsche Biographie. 1. Bd. S. 544.
 ㉒ E. M. Arndt: „Meine Wanderungen —“ S. 2—S. 8.

三 漂浪記から見た『ドイツ軍團』組織とアルント。並にタウロゲン協約締結の真相

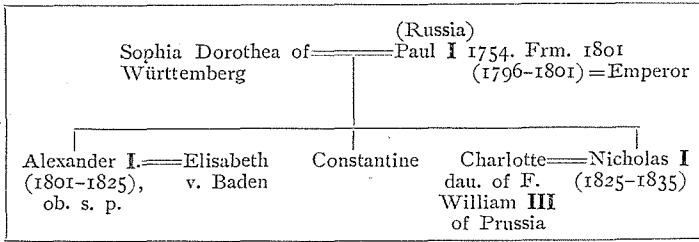
もとプロシアの内閣に列して商工大臣の要務を統べ、内政の刷新に非凡なる手腕を振ふたスタイン男は、彼れの不撓の精力と聰明なる先見に愧を懐くナポレオンに追はれて、遠くロシアに亡命しベテルブルグに放浪の客となり、所謂自由的諸國家の聯盟を造つて、ナポレオンの世界主義に抵抗を試みやうとした。漂浪記によるとスタインのロシア廷に於ける勢力は可なり大きく、皇帝アレクサンドル一世と相計つてナポレオン征服の計を講じ、また永く普・露兩國を拘束せるチルジット條約^{一八〇七年}を破棄せんと計り、遂には帝に迫つて該條約の支持に任せる露の權臣ロマンツォフ伯(Graf Romanzoff)を罷免させようとするに至つた。

爾後スタインの勢力は日を追ふて加はり皇帝アレクサンドル一世の顧問として最高位に座し、(sim Rath des Czaren Alexander der erste und Oberste)王公貴人と自由に交り、爲めに帝の側近者から或は嫉まれ或は怖れられ、しかも彼れの自由主義的民族統一に憧れをもつ多數人から極度に賞讃と崇敬を集めるに至つた。

なほ時期は少し下るが、スタインのロシア廷に於ける勢力の絶大なるを證する一箇の挿話が、『漂浪記』の中に掲げられてある。

『故の露帝^{ツァー}ポール一世の皇后ソフィア・ドロテア(Sophia Dorothea of Württemberg) ^{ドイツ、ウエール}テンメルグ家出はナ

ポレオン一世のロシア敗退の報を得ると同時に、その憂悞の念から解放され、また人々に通有な戰勝



なかつたであらう。「云々。乃で前皇后はスタインの好意を謝し、「男爵よ、貴下の云ふところは眞なる

氣分に驅り立てられ、倨傲なウエルテンベルグ式の言説もて、スタイン男に次の如く問ひかけた。「若し、假りに今一人のフランス兵なりとも、ドイツ國境を突き破つて脱れ去るやうなこともあらうなら、妾は一箇のドイツ婦人たるを耻づるであらう」云々。これを聞けるスタインは滿面に怒氣を漲らし、突如立上つて一禮し、口速に次の如く答へた。「陛下よ、この場合陛下の屬するかくも偉大な忠誠勇武な國民(ドイツ國民)に對し斯かることを仰せられるは甚ば以て不當であると考へる。陛下は却つて妾はドイツ國民について耻辱を感せぬ、耻辱を覺ゆるは、寧ろ妾の兄弟、從兄弟等いはゆるドイツ諸侯に關してであると言はなければならぬであらう。余^{スタ}は一七九一年以降一七九四年までライン方面に生活した。その間の經驗によればナポレオンの侵入に關し、ドイツ國民は何等の責任をも有せぬ、若しドイツ諸王侯にしてその責務を果したなら、一箇の佛人と雖もエルベ、オーデル、將たワイクセルの諸川を超えて侵入するやうなことはなかつたらう。況んやドニエストル河を超えるが如きは決して夢想だも及ば

ものがあらう。妾は貴下の忠言に對して感謝の意を捧げる。』云々。と有難き御言葉があつた。』云々。これらの事實によつて推考すればスタインのロシア帝室に於ける權力は殆ど絶對的であり、アレクサンドル一世と相結んで、一代の英傑ナポレオン大帝とその力を競はんとしたことが了からう。

この露京に於ける失意の權力者スタインの許にモーツツ・アルントの訪づれ至つたのは一八一二年の夏であるが、何故アルントはその熱愛せるドイツを去つて遠くロシアに趣いたのであらうか。

アルント^④に依りアツチラと呼ばれたナポレオン一世の勢は、一八一〇年代に至つて高潮に達し、西歐の殆ど全部を擧げて彼れの足下に懾伏するに至つた。しかもこの時に當つて彼れロシアが敢へて大陸封鎖令に背いてナポレオンに斷然たる敵意を示した爲、東歐の風雲は何となく危急を訴へるに至つた。『漂流記』にも「東方ロシア將たポーランドの沼澤地・森林地帯や荒原の邊^{ほら}、地平線上何となく陰酸の氣が漂ふた。』とあるのは當時の形勢を描いた髣髴たらしめるものがある。

されば元來が熱烈な祖國愛の精神に富み、徹底的な反佛思想に終始せるアルントとしてはナポレオンの勢力の瀾漫せる西歐方面に留まるに忍びず、寧ろ起つて大ナポレオンに反撃を加へんとする意氣旺盛なロシアに趣き、共に力を併せて回天の偉業を策すべきであつた。『飄浪記』に、「實際上、余^{アルント}にとつて西方の世界は餘りにも狹隘に感せられた故、必然的に大きな新たな希望と豫期の下にロシアに趣いた。勿論余の思惟するところ歐洲に於て、其露二國以外余にとつて、より安全なところは存

しなかつた。』^⑥「Ich war aus Noth, weil mir im Westen die Welt wirklich zu eng werden wollte, doch auch mit Erwartung und Hoffnung grosser und neuer Dinge gen Osten nach Russland gezogen. Bei der Lage der Dinge, wie sie war, und bei meiner gesinnung war in Europa nirgends mehr eine sichere Stätte für mich als in Russland und Grossbritannien」^⑦と叙へるのはアルントの庶幾するところを充分に表白して餘蘊が無い。

なほこの際、アルントの斷然『ロシア入り』を執行したのは、彼れの同志ともいふべき偉大なる先行者スタイン男によつて誘引された結果である。蓋し「スタイン男はアルントに同じく、ナポレオンから斥けられ、偶々アルントの著述^⑧を讀んで彼れの人物に着眼し、兼て企畫せる『ドイツ軍團』(Deutsche Legion)の編成につき、アルントの献身の努力を要求するものがあつたのである。』

ここにいはゆる『ドイツ軍團』とは果して如何なるものであつたらうか。

漂浪記に依るに『(ナポレオン^⑨に對する)尊むべき憤激と、(祖國の恢復を企圖せる)炎々たる期望、これらに驅られた勇敢な多くのドイツ人が『祖國ドイツ』(Deutsches Vaterland)の共同目標を掲げ、爭ふてロシアに赴き、ここに露帝^{ツァー}アレクサンドル一世の麾下にナポレオンと戦ひ、且つ全力を擧げてドイツの青年を反ナポレオン軍に仕立て、祖國救済に一臂の力を揮はせようとした。これがいはゆる『ドイツ軍團』創立の思ひ付となつたのである。』云々と述べて居り、しかもこの創立の指導者、激勵者たり

しは夙にロシアに「命せるスタイン男その人であつたのは、ベルツのスタイン傳に記述するところを推考して知り得べきである。即ち同書第一卷「祖國と名譽の旗幟の下に集まるべきドイツ人への喚びかけ」(, Anruf an die Deutsche, sich unter den Fahnen des Vaterlandes und der Ehre zu sammeln. *)なる檄文に、「露帝アレクサンデル陛下は凡ゆる漂流中の勇敢なドイツ士官并に兵卒をドイツ軍團に編入するを申出づべき旨、難有くも余(スタイン)に御委託になつた。」(Des Kaisers Alexanders Majestät hat mir den Auftrag zu ertheilen geruht allen auswandernden braven deutschen Offiziers und Soldaten die Anstellung in der deutschen Legion anzubieten)と記してゐるが、そのいはゆるアレクサンデル一世の創意にかかる如く記したのは事實スタインの提唱に基くものの軍團完成に一種の權威を添へんが爲かくは記せるものであつて、スタインが露帝の顧問として如何に絶大の勢力を有せしかの既述の説明に徴せば、自らこの間の情勢を明かならしめるものがあるであらう。

ともあれアルントは兼ねて畏敬せるスタイン男の招きを受け、これが『ドイツ軍團の完成に畢生の助力を傾注することとなつた。漂流記』に、「最初ドイツ軍團の創立に對する計畫はペテルブルグに於て工作された。そして言はばこれが爲、余(アルト)の就任當初の勞作と事務が準備された。」云々と述べてゐるのもこれらの關係を物語るものでなくて何であらう。

アルントはこの折グライフスワルド教授の職を去り、東歐ロシアに遊ばんとする希望の切なるもの

があつたので、今、スタインの誘ひを受けては矢も楯もたまらず、ベルリンを過ぎりて、シレシアの
プレスラウに出で、これより東南に進んで埃領ボヘミアのブラーグに出で、更にガリチアを過ぎつて
露京ペテルブルグに着き、(一八一二年八月末)待ち焦れたるスタイン男に會つて、一日の邂逅十年の
知己の如く共に力を併せて『ドイツ軍團』の完成に向ふた。』

漂浪記によるにこの時スタイン男の年齢既に五十五、うち見たるところずんぐりとした中背の體格
で、頭に白髪を交へ、幾分前屈みになり、眼は爛々と輝き、その舉作には、自ら親みの情が溢れてゐ
た。』云々。なほ漂浪記中、アルントは口を極めてスタイン男を讚美し、「ゲーテとスタインこの兩者こ
そ十九世紀に於ける最も偉大なるドイツ人であり、共に褐色の眼で世界を熟視してゐる。併し、ゲー
テの眼は廣くうち開かれ、和やかな光に充ちて人類を見下ろして居り、スタインの夫れはより小さく
しかもより鋭く、輝くといはんよりも寧ろ閃くがやうであり、時に爛々たる閃光を呈示する。概して
スタイン男の眼は誠實と友誼を現はし、一旦、極度の嚴肅の態度にある時、また憤怒の情に驅られる
時、眼光は鋭く人を射、これを威嚇するところのものがある。強烈な精神の動搖にある時、彼の顔容
には異なる二箇の人格を反映する。彼れの前額、時にはその眼差は不機嫌の雲霧に蔽はれ、しかも
その間、堂々たる自信に充てる精神の清らかな澄み徹ほつた青空が輝いてゐる。然るに顔容の下半部
頬・口・顎のあたりは強烈な怒の衝動が顫動する。實にスタインは神に恵まれた暴風のやうな人であり

汚れを清め又吹き掃ふことが出来る。されど神はこの忠誠・勇敢・敬虔なる人に對し、世界の爲また國民の爲の快き日の光と豊饒にする雨とを與へた。」

「スタイン^⑮の學問はまた眞に堂に入れるものがあり、その少時家庭に於て將たゲッチンゲン大學に於て孜孜として研學に日も足らず、己が國民及び祖國の歴史、また諸國民の歴史をば讀書及び旅行によつて充分に會得し、後にプロシアの官界に身を投ずるに至つては、その官職に必要な研學探究に充分の力を致した。彼れはまた雄辯家として獨特の伎倆を有し、一度、大臣として議政壇上に立たんか、その不屈の勇氣、その徳、その力を以て凡ゆるものを打倒し、且つこれを粉碎せねば止まなかつた。」云々と述べてゐる。

なほ漂浪記によると、「四十三歳^⑩の自ら(アル)が既に二十五年前から浮世の波風にもまれた五十五歳のスタイン男の前に立つた時、生れ乍らの賤民(彼れの父の時まで奴隸の境涯にありしをいふ)たる己が身分を想ひ起して、羞耻の念にたへなかつた。しかも流石に屈從の情には擒はれなかつた。」云々と述べてゐるのはスタイン男に備はる自らなる氣品・威風に壓倒されたが爲であらう。

しかし、漂浪記に述べおるやう、スタイン及びアルントの兩者は、その心だてなり、その世界觀(Weltansicht)に於て自ら相一致するところがあり、そしてこれが世界觀とは、自由的民族主義に統一されたロシア將たドイツ的勢力により、自由的諸國家の聯盟を造つて、やがて世界統治に猛進せるナ

ポレオンの勢力を阻止するにあつた。

さればアルントが遠路を厭はず、ペテルブルグにスタインを訪ふやスタインの喜びは一方ならず、「貴下^⑧の來訪は喜ぶべき至りである、ここに吾人は共に勞作を得べきを庶幾はねばならぬ。」といふたことが、同じ漂浪記に記されており、しかもそのいはゆる勞作なるものが軍團組織のことに係はるゝるのは上述へ來つたところによつて明かであらう。

勿論スタインとアルントはその庶幾するところを一にするとは云へ、その閱歷聲望より見て自ら社會上の地位に懸隔を生ぜざるを得ぬ。即ちスタイン自身はドイツ軍團組織の統領であるが、アルントは僅にその一祕書たるに過ぎぬ。スタインの聲名に隠れて裏面の工作を營むに過ぎぬ。アルント自らもその漂浪記に於て、「余は序でながらいふが、スタインは余を遇するに陣笠的祕書、將た隨行員を以てし、ドイツ軍團組織の費目の中にもかかる名目を以て掲げてゐる云々。」と記してゐる。しかしアルントは心中決してこれに不平でなく、日夜營々として軍團組織のことに奔命したのは熱烈な祖國愛と反ナポレオンの態度に於てスタインと肝膽相照するものがあつたからである。

さて祖國恢復と反ナポレオンの精神に驅られ、ロシアに亡命せる一團のドイツ人が相結成し、スタイン男の指導激勵下に、いはゆる『ドイツ軍團』を創立するに至つたのは、上述の如くであるが、この軍團の發展に隆乍ら多大の貢獻を致したのは、スタイン男とその主義方針を一にせるアルントであり

次に掲げる漂流記記載の要約の如きは這般の消息を傳へて餘蘊無きものがある。

抑も²²⁾ドイツ軍團は當初亡命のドイツ軍人將たドイツの志士共によつて組織されたのであるが、その總員果して幾ばくに達せるやは明かでない。しかし該軍團所屬の士官は自國と關係を絶てる、或は自國軍から歸休の許を得たプロシア人そのものであつて、遠くロシアに脱れて、細心の計畫を講じ、機を見て彼等の刃をフランス人の頭上に加へようとした。このプロシア士官の多くはプロシアの名門貴族の出であり、後には古きプロシアの軍服を身に纏ひ、いはゆるドイツ軍團の將軍將た司令官として戰場に武名を残したことも少く無い。中に最も注意すべきはドーナ伯爵 (Graf Dohna)、ホルステ男 (Freiherr Horste)、ゴルツ男 (Freiherr Goltze)、ホルン男 (Horn, Freiherr)、アルフヘンスレーベン男 (Freiherr Alvensleben) 等、これである。

その他『ドイツ軍團』の創設に功勞淺からぬ貴族や軍人も大抵はドイツ人であり、先づ第一に注意すべきはオルデンブルグ公 (Herzog v. Oldenburg) である。公はドイツ、オルデンブルグ出の貴族軍人で一八一〇年頃ナポレオンによつてその國土を追放され、露帝アレクサンドルは從兄弟の關係に當れるものから、ドイツ、ブレーメン出のアルントシユルド大佐 (Oberst Arentschild) を副官として伴ひベルブルグへと亡命した。公はスタイン共々にドイツ軍團の完成に充分の力を致し、後には單なる名稱だけではあつたが、該軍團の司令官にまで推戴せられるに至つた。

次に軍團の功勞者として數ふべきは伯爵リエフエン將軍 (General Graf Lieven) であり、彼はロシアの軍人で、プロシア駐在の公使となり、オルデンブルグ公やスタインと協力して軍團完成に努め、鄭重な人附きの善い中々の才物であつた。その妻のリエフエン伯爵夫人はクールランドのドイツ貴族の出、活動的であつて社交に巧みに、その夫君を助け間接、軍團完成にも貢獻があつた。

なほオルデンブルグ公の副官アレントシユルド大佐であるが、彼はその先、スウエーデンに出で、グスタフ・アドルフ王のドイツ、ホメラニアを領するに及んでここに遷り住み、後ウエーゼル河畔のブレーメンに移つて、殆どドイツ人と選ぶなきに至つた。この點に於ては殆んどアレントその人と經歷を一にする。アレントシユルドは沈着で毅然たるところがあつたが、敏活の才に乏しく、爲に軍團で指導的地位に上ることが出来なかつた。

この頃スウエーデン人で反ナポレオンの精神に驅られ、遠く東に安住の地を求め、ペテルブルグに移住しドイツ軍團に参加する者も多かつたが、中に學者、研究家さては商人等も少くなかつた。が、その中ホメラニア出の多いのは着目すべき點である。蓋しホメラニアはスウエーデン領とは云へ、その地ドイツにあつて、しかもドイツのプロシア的文化の浸潤するところであり、反ナポレオンの精神が一段と盛んなものがあつたからである。隨てアレントに信交あるスウエーデン人フォン・ミューレンフェルス中佐 (Oberstleutnant Mühlenfels) ももとホメラニア出の人物で、冒險心に富み、スタイン等を

援けて共にドイツ軍團の進展に大なる功勞があつた。

かく『ドイツ軍團』はドイツ各方面さてはドイツ的スウェーデン領からの萬里遠征の勇者連を集めてゐるので、時には軍團指揮者の間に内訌争亂が絶えなかつた。幸ひアルントはスウェーデンにもドイツにも一方ならぬ關係があるので、かかる場合、何時でも仲裁調停の役目を引受け、スタイン、オルデンブルグさてはアルントシュールドの間の争をさへ取り裁いて、軍團の將來に少なからぬ裨益を與へたと云はれてゐる。

なほ『ドイツ軍團』は祖國回收、反ナポレオンの標識の下に、フランスに對して武力的抵抗を試みようとするのであるが、その課せられた重要任務の一として、軍團内に一種の宣傳部を置き、始終小冊子を刊行して要求、聲明さてはナポレオンの宣言に對する反駁宣傳をなすを任務たらしめ、これら宣傳文はロシア文またドイツ文を以て物するを普通とし、その何れもの場合フランス語の譯文を添へ、これをロシア、ドイツ、スウェーデン方面に擴げるを常とした。そして使用文辭はなるべく熱烈の調を帯びしめ、これを²⁵⁾して火花の如く飛び散らしめ、此處彼處、火藥に裝填された人心に點火し、火勢の蔓延を庶幾ふ²⁶⁾が如き有様であつた。

そしてこれらの文案は大抵スタインの命令でアルント自らの起草せるものではあるが、その外獅子と異名をとつたスタイン男の命令でフォン・アンステット(von Anstett)、ネッセルローデ(Nesselrode、

(Traut) なる兩獨人の起草せるものも少く無い。

この中、ネッセルローデ伯の祖先はスタイン男の夫れと親密な關係を有し、ウエステルワルド (Westervald) の高地に於て、將たウエッテルラウ (Wetterlau) の平野に於て、或はまた帝國市たるウエッツラー (Wetzlar) 及びリンブルグ (Limburg) に於て祭典演武の時互に雌雄を決したと言はれてゐる。伯の父なる人は放浪してペテルブルグに至り、逆境の間に死んだが、露のカタリナ女帝はその孤兒なる伯を養ふてベルリンに遊學させ、天晴、俊秀の才として令名を馳せしめるに至つた。今やナポレオン戰役に歐洲の風雲番ならざる際、選ばれてドイツ軍團宣傳部に列し、對獨宣傳の要衝に當ることになつた。伯は時にスタインの命に背いて宣傳の文辭に手加減を加へることもあつたが、大要スタインの指導の下に將たアルントの助言の下に過激なる言辭を陳ねて、大に反ナポレオンの主義を煽揚するに至つた。

既掲のヘルツ、スタイン傳の „Aufuf an die Deutsche, sich unter den Fahnen des Vaterlandes und der Ehre zu sammeln“ はそが果して誰人の筆に成るやは別として、スタイン男やアルントの強烈な反佛思想を表明せるものあるは既述の説明に徴して明かであらう。今この檄文の主要を挙げれば、『何故諸君 (ナポレオン軍に屬するドイツ人) はロシアと戦ひ、ロシアの國境を超えて侵入し、なほ幾世代、諸君と親密な關係を有し、幾千の諸君の同胞をその國內に迎へ、しかも該同胞中の有能の才にその職業的努力

に對する報酬を附與せるロシア國民に對し敵對行動を執るに至つたか。かかる不正な攻撃に諸君を唆かしたものは果して誰人であるか。この攻撃は單に諸君に對して破滅的である。そしてそれは幾十萬の人命を賭し、諸君の絶對的屈從を以て終りを遂げるであらう。しかしかかる攻撃は諸君の自由意志的決心の結果でない。この事は諸君の健全な理性、諸君の正義感に見て立證することが出来る。諸君は絶えず不幸なるヨーロッパの服從を完成せんと努めるフランス人の征服慾の不幸なる道具である。……………」云々、と述べ更にこの檄文の末尾に於て既述のドイツ軍團組織に關する事項を述べ、なほ犠牲的行爲によつて祖國の爲に奮闘せるドイツ君主の一人(即ちプロシア王。一八一二年ロシア中心の統一を)から命を受け、ドイツの自由の恢復に心血を注ぐのは、取も直さずドイツ軍團の使命である。」と説き切に同胞の共力を望んでゐる。

兎まれ祖國愛と反ナポレオンの精神に充ち／＼てゐるのはこの檄文の特色であり、なほそれとなくドイツ、ロシア兩國民の提携を説くのは、いはゆる自由的諸國家の聯盟を主張せるもので、共にスタイン、アルントの平素の持論を表明して餘蘊なきものと云ふことが出来よう。

さて一八一二年秋、ナポレオンの大軍がモスコワ近く攻め寄せるに至つては、ドイツ軍團の士氣も自ら緊張し、露に在留して久しくナポレオンに復讐の刃を研いた、ドイツ軍人の意氣は自ら昂揚し、オなほ在露の同胞に協力して一舉にフランスの羈絆を脱せんとする多くの軍人がプロシアから参加し、

その中に有名なシャルンホルストの友人で、後、ウイルヘルム一世時代に陸相となつたボーエン大佐 (Oberste Boyen) のやうな人物もゐたと漂浪記の中に記されてゐる。さてこの年の九月佛露兩軍大にポロヂノの野に戦ふたが、この折ドイツ軍團の若干も戦闘に参加せりと覺ぼしく、軍團所屬のサクツニア (ドイツ) 人クリンゲル (Klinger) の一子も壯烈な最後を遂げたことが、同じ漂浪記に掲載されてゐる。

初めナポレオンのロシア遠征にはドイツ占領地帯から募られた兵卒さてはライン同盟所屬のもの、また普墺兩國の援軍等併せて十五萬の兵がナポレオンの麾下に立つに至つたのであるが、スタイン、アルント等の努力にかかる宣傳がこれら兵員をして次第にフランスの幕下を離れ、祖國回收の途に猛進せしめるに至つた。勿論ナポレオン敗退の折心ならずもロシア軍の手に擒へられたものもあつたが中には兼ねての激勵に銜を逆にして露軍の中なるドイツ軍團の軍門に降るものもあり、次第にドイツ軍團の氣勢を昂めるに至つた。かくて一八一二年普露兩國タウログデンの協定 (Convention of Tauroggen) 成り、解放戦役の序幕茲に開けるに及び、ドイツ軍團に屬する歩、騎、砲兵その數凡そ五六千、英露兩國の補助金の下に軍裝を整へ、ケーニヒスベルグを進發し、殊に軍團の大部はプロシア本軍に復歸し、各軍何れも佛軍を直指して進撃を開始し、ナポレオン没落の端漸く茲に開けた。

このドイツ軍團の活動がナポレオンの没落に對し果して幾何の效果を生せるやは容易に速斷の限で

はないが、この軍團が中心となつて盛に熱烈な祖國愛將た反フランス的精神を鼓吹し、遂にナポレオン
の勢威に屈せるプロシアを起たしめて、普露タウロツゲン協定に導いた功は充分これを認めねばな
らぬ。そして、この軍團の組織發展の爲、筆に口に畢生の力を致したスタイン、アルントの功は決して輕
視すべき譯合でない。アルント自らその漂流記に記せるやう、「二年の歳月に互つて余の筆端より迸ら
せたインキの滴りは、ドイツ軍團の決定と擁護のため可なりの貢獻を奏した。」(»habe (ich) auch für
die Bestimmung und Vertheidigung dieser Deutschen Legion in Zwei Jahren manchen Dintropfen
aus der Feder laufen lassen müssen»)云々の言は、必しもアルントの自畫自讚の言辭とのみ見るこ
が出来ぬ。」

今や吾人は最後にドイツ軍團を中心としての反佛的活動——主としてスタイン、アルントの——が、
如何に解放戦役の序幕を切つて落したかのタウロツゲン協定に導いたかを瞥見しよう。

そもタウロツゲン協約は一八一三年普のヨルク將軍 (General York) が獨斷專行によつてロシアと締
結せるもの、よく祖國をしてナポレオンへの隸屬的地位を脱せしめ、以て將來の發展隆盛を馴致せし
めたやう信せられてゐる。かのヨルク研究の典型を以て稱せられてゐる、「Dioyren: Leben des Grafen
York v. Wartenburg.」の如きも大凡かかる觀點に立つてヨルクの功業を闡明するに努めてゐる。併し
余輩が嘗て史學雜誌に紹介せるやう、Beihet zum Militär Wochenblattに掲げたヤンソン中將の、Das

Verdienst um die Konvention von Tamroggen”なる論文は、タウロツゲン協定を結んで普をフランスの東縛から脱せしめた名譽は必しもヨルク將軍の獨占すべきもので無く、事實、將軍は一八一二年八月十二日の普王フリードリヒ・ウイルヘルム三世の内命に従つたに過ぎぬと考證する。即ち(イ)一八三八年、ウランゲル少佐がフリードリヒ・ウイルヘルム四世(一八一二年代の王太子)に上つた建白中「ウランゲル自ら王(フリードリヒ・ウイルヘルム三世)に勸めてヨルク將軍に内命を傳へ、ナポレオン軍總退却の場合、普は聯合軍を離れてグラウデンツ(Graudenz)要塞に退き、獨自の態度を執るべき旨勸告したこと、(ロ)ウランゲル少佐の書簡、將たその報告書にもこれを立證すべき間接資料の存すること、これらによつて王の所謂『内命』なるものの存在を立證せんと努める。なほヤンソンの根本史料に基く研究では、『協約直前、ヨルクはその副官サイドリツツ Seydlitz を王の許に派し、對佛態度について詳細の訓示を仰ぎ、サイドリツツは協約締結に先だつ一日、即ち十二月二十九日一八一二年を以て王の訓命を齎らし、「塙の態度がより明らかなるに至らば、佛との同盟を破つて、事情に従ひ善處するも可なり、しかもその場合、プロシア王に關係なきやう行動するが必要である。」云々と報告したので、ここにヨルクの意向が決し、所謂十二月三十日のタウロツゲン協約(中立協約)が成立し、(イ)ヨルク軍はナポレオンの麾下を離れ、規定の中立地に退いて王命を待ち、その間、一定路による該地帯の通行を露軍に認める、(ロ)普王が該協約を認めぬ迄も、翌年三月一日まで決して露軍と戦はざるべし。等約するに至つた。』云々と云ふの

である。若しヤンソンの研究が果して正鵠を得たものとせば、ヨルクの獨斷專行による該協約の成立はこれを肯定すべきでなく、寧ろウランゲル少佐や王フリードリヒ・ウイルヘルム三世の斷然たる決意が遂に協約の成立に導いたと斷すべきであらう。果して然らばかくもベルリン廷の空氣をして反佛的態度に傾かした所以は何であらうか。吾人は『ドイツ軍團』を中心とするスタイン、アルント等の活動が一因となつて、事遂にここに至らしめたのを論斷するに憚らぬ。

漂浪記の掲げるところ、『ドイツ軍團』創立に功勞ある一人に、伯爵リエフエン將軍 (General Graf Lieven.) がある。リエフエンは該記録の傳へるところによると、ロシア大使としてベルリンに駐劄せる人で、誠に親切な氣立ての善い、しかも必しも偉大な人物ではなかつた。併しその夫人即ちリエフエン伯爵夫人はクルランドのドイツ貴族の出で、夫君を助けて共々軍團の完成に助力を與へたのは前に叙述した通りである。勿論、伯爵并に同夫人の軍團創設に功勞ある以上、同じ事業の中樞人物たるスタイン男と昵近の關係にあるのは取立てて述べるまでも無い。

なほ漂浪記に徴するに伯爵夫妻はアルントのベルリン滯留當時よりの知己であつて、アルントがロシアに發向せる際も旅行券の下附等につき何くれと懇切の情を致した。これに依つて考ふれば、ドイツ軍團の完成に奔勞せるスタイン、アルントの心情——ドイツ祖國愛と反ナポレオンの精神——は良がて他國民ながらリエフエン伯爵夫妻の心情そのものであつたやうに思はれる。また露帝アレクサンド

ル一世もスタイン一派とその志すところを一にせる關係上、帝命を奉せるリエフェンは同時にスタイン、アルント等の所期せるところを達成する所以でもあつた。ベルツ^⑩のスタイン傳に依ると『リエフェン伯はアレクサンドル帝の命を奉じ、「直ちにオーストリヤと了解を遂げ、反フランス的態度を執る」をプロシアに要請し、なほ精細なる命令を出してヨルク將軍に歸趨を示すべきをプロシア側に懇請するところがあつた。』と記して居り、既述のヤンソンの研究にある、『ヨルクの副官ザイドリッツが普王の命を將軍に齎らし、「頃の態度がより明らかなるに至らば佛との同盟を破り事情に従つて善處するも可なり」云々と云ふた』その事に照應する。しかしてこの王命が契機となつて普露兩國間のいはゆるタウロツゲン協定が成立せりと見る時、該協定の因由するところは、遠く溯つてドイツ軍團を中心とせるスタイン、アルント等の活動にあるのを看取すべきであらう。

なほ既述のスタイン、アルント等のナポレオン配下の同胞に出した『ドイツ軍團宣傳檄』に、『しかしかかる攻撃(ナポレオン軍に屬してロシヤに攻撃を加へること)は諸君の自由意志的決心の結果でない。この事は諸君の健全な理性諸君の正義觀に見て立證することが出来る。諸君は絶えず不運なヨーロッパの服従を完成せんと努めるフランスの征服慾の不幸なる道具である』云々といふやう絶叫したのが、如何に佛軍隸屬のヨルク軍團に異常な感激と興奮を將來したであらうと考へる時、假令王の内命はあつたにせよ、一面異常な獨自の決心を以て對露タウロツゲン協定を締結したかが了かる。この點でも亦、同協定に及ぼしたス

「マイン、アレント等の影響感化の決して少なくないのを考察すべきであらう。」

(註)

- ① E. M. Arndt: Meine Wanderungen und Wandelungen —, S. 31.
- ② Ditto. p. 65.
- ③ Ditto. S. 87—S. 88.
- ④ Ditto. S. 3.
- ⑤ Ditto. S. 2.
- ⑥ Ditto. S. 51.
- ⑦ Ditto. S. 2.
- ⑧ Ditto. S. 2.
- ⑨ Ditto. S. 7.
- ⑩ G. H. Pertz: Aus Stein's Leben. I. Bd. S. 501.
- ⑪ E. M. Arndt: Meine Wanderungen und Wandelungen —, S. 7—S. 8.
- ⑫ Ditto. S. 4.
- ⑬ Ditto. S. 4 13, 36r.
- ⑭ Ditto. S. 61—S. 62.
- ⑮ Ditto. S. 64.
- ⑯ Ditto. S. 4.
- ⑰ Ditto. S. 41.
- ⑱ Ditto. S. 3.

- ⑲ Ditto. S. 24.
- ⑳ Ditto. S. 19.
- ㉑ Ditto. S. 25.
- ㉒ Ditto. S. 7—S. 17.
- ㉓ Ditto. S. 41.
- ㉔ Ditto. S. 14.
- ㉕ Ditto. S. 25.
- ㉖ Ditto. S. 27.
- ㉗ Ditto. S. 27.
- ㉘ G. H. Pertz: Aus Stein's Leben. Bd. I. S. 500—S. 501.
- ㉙ E. M. Arndt: Meine Wanderungen und Wandelungen —, S. 84.
- ㉚ Ditto. S. 82.
- ㉛ Ditto. S. 7.
- ㉜ Ditto. S. 18.
- ㉝ Ditto. S. 19.
- ㉞ 史學雜誌第二十四編第五號『拙著「普魯西側より見たるタウロンゲン協約締結の由來」』
- ㉟ E. M. Arndt: Meine Wanderungen und Wandelungen —, S. S. 9, 10.
- ㊱ Ditto. S. 10.
- ㊲ Pertz: Aus Stein's Leben. S. 546.

四 漂浪記から見たスタインの對イギリス、スウェーデン政策とアルントの功勞

一八一二年十二月三十日普將ヨルクのロシアに對するタウロツゲン協定となり、尋いで翌一八一三年三月十七日、普露兩國のプレスラウ軍事協定が出来、依つてここに兩國はフランスからドイツを解放するに充分な力を致し、進んでライン同盟に解散を命じやうとし、その目的達成の爲ドイツ諸侯と民衆の援を受け得るに全力を致すべき旨申合せ、スタイン・アルント等の志漸くここに遂げられようとした。

この前後、ロシアに在つてドイツ軍團組織に全力を注いだスタイン并にアルントは英國并にスウェーデンさてはこれに次ぐ諸列國をも對佛聯盟側に誘はふと企てた。この事は漂浪記の中にスタイン等の立場を述べ、「當時英國をして聯盟を全幅的に支持させ、またスウェーデンその他諸列國を聯盟側に得るのが極めて緊要事であつた」と記してゐるのでも了かる。

かくて英國對普露兩國の折衝は主としてスタイン、アルント等の活動によつて行はれ、漂浪記によると、『この際アルントが折衝に便宜な英國一流の政治家として擧げたのはミュンスター伯 Graf Münster^②であり、しかもスタインとミュンスターこれら兩者はその性格なり政見なりに於て自ら相違があり、スタインは自信に富み、自由を重んずる帝國騎士の風貌を備へ、ドイツの將來をプロシアの王室に囑して居り、ミュンスターは十八世紀の「ユンケルの貴族」に見るがやう、極めて傲然たる貴族的風

格を具へ、スタインの意見に對しても反駁を加へることが屢々であつた。その上、ミュンスターの意見で、ドイツの解放はその諸侯の助を以てこれを成し、後にこれら諸侯の數を減らして二三の有力なものに政權を委ね、結局、帝權を強大にして、聯邦の統制を充分ならしめるやうにし、そしてこれが帝位に英國に關係深い、ハノーヴァー王家を推戴しようと考えた。』やうである。

勿論スタイン、ミュンスター兩者が反ナポレオンの思想に於て一致するところのあるのは、漂浪記に記述するところで明瞭であるが、既述のやうにその性格なり政見なりに自ら相違するところがある以上、時に兩者の扞格を來すやうなことも決して少くはなかつた。

この間在露のスタインの命を奉じ對英折衝に筆を執つたのはアルントであり、特にスタインとの意見の齟齬を來し易いミュンスター宛ての書簡は一段の苦心であつたらしく、漂浪記の中にも『英國との書信の交換は予にとつて最も興奮的な、最も困難なものであつた。』(Der englische Briefwechsel war der heisseste und schwerste für mich.)と記しておる。とまれスタインの眞意を奉じ即かず離れず極めて持久的に、ロシアとイギリスの政治的交渉を適當に處理し、英國をしてよく普露二國への同盟に賛同を惜まざるに至らしめたのは、確にアルントその人の功と言はなければならぬ。

しかもこの際、アルントの外交方針が政治上、經濟上、佛の發展を恐れる英國の方針に乗じたのは特にここに贅するの必要を見ぬのであつて、確にアルントその人の外交的手腕の凡ならざるを思はし

める。

かくてローズ^⑦のナポレオン傳もこの間の消息を叙し、「これまで歐洲に起つた如何な協定よりも一層確實な英普露協定への途が開かれるに至つた。」と述懐してゐる。

次に北歐の強國スウェーデンをロシア側に誘はふといふ運動であるが、これにもスタイン、アルントのもつ關係は史上格段な注意を要する。

勿論、スタインはスウェーデンを反佛同盟に加へ、逐次ナポレオンの勢力を衰滅に終らせやうと考へ、さてこそ、もとスウェーデンに出で、後にプロシアの民風に化したアルントを擢んで専ら對スウェーデンの交渉に當らせた。漂浪記に依るにこの折スウェーデン側を代表してアルントとの折衝に當つたのは、もとスウェーデンのグスタフ四世に奉仕し、今はロシアに留まつて露領フィンランドの總督であるスウェーデン人モーリッツ・アルムフェルト伯(Graf Moritz Arnfeld)であつた。^⑧アルムフェルトはアポロ的體容の美と精神の美を兼ね、歌唱にも通じ、その上、劍道にも長じてゐた。しかもスタインは彼を目して輕率冒險的な漂浪者となし、眞面目にこれと應接するを悦ばなかつた。

當時^⑨、スタインはスウェーデンの同盟參加は害あつて無意義であるやうにも論じてゐるが、こは要するにその本心ではなく、アルムフェルト輩との交渉を嫌惡せるための結果であらう。

ともあれアルントはもと自分がスウェーデン人であつた關係もあり、また一つには漂浪記^⑩に記すが

やう、彼は決してアルムフェルトを目するに一箇の輕薄な奸物、將た片々たる阿諛者を以てせず、忠誠友誼の爲、飽まで正當な犠牲を捧げて厭はざる人物と考へ、これとの應接接衝をも辭すべきでないやうに信じてゐた。加ふるにアルムフェルトは露領フィンランド總督たるより見て、可なりの信頼を露帝アレクサンドル一世に得てゐたのは疑なく、その上アルント自ら露の上流貴族に澤山の知己を有し、アルムフェルトの人物も可なり熱心に賞揚され居るのを知り得たので、旁々この方面に熱心な交渉を續け、ここにスウェーデン、ロシアの談判が順調に進捗し、殊にスウェーデン王カール十四世(ヴェルナドット將軍)はその經濟政策上、ベルリン條令を無視し、自衛上、ロシアとの聯盟を固うする必要に迫られ、遂に一八一二年ロシア、スウェーデンの協定が出来、茲にスウェーデンはノルウェー併合を條件に英・普・露三國の反佛同盟に加入することになり、一八一三年三月三日、別に英・瑞ストックホルム條約が出来、英はスウェーデンのノルウェー併有を認め、なほグアドループ島 (Guadeloupe) をスウェーデンに割き、更に一百万「ポンド」の軍資金をこれに供與し、スウェーデンをして専心、ナポレオン討滅に當らしめることとなつた。

かく考察し來れば解放戦役の基礎的工作、英・瑞兩國の引込運動にアルントその人のもつ直接・間接の貢献も決して少いものではないのである。

(註)

- ① E. M. Arndt: *Meine Wanderungen und Wandelungen* — S. 32.
- ② Ditto. S. 32—S. 33.
- ③ Pertz: *Aus Stein's Leben*. I. S. 594.
- ④ Ditto. S. 595.
- ⑤ Arndt: *Meine Wanderungen und Wandelungen* — S. 32.
- ⑥ Ditto. S. 29.
- ⑦ H. Rose: *Life of Napoleon I*. Vol. II. p. 277.
- ⑧ Arndt: *Meine Wanderungen und Wandelungen* — S. 36.
- ⑨ Pertz: *Aus Stein's Leben*. I. Bd. S. 660.
- ⑩ Arndt: *Meine Wanderungen und Wandelungen* — S. 39.
- ⑪ Ditto. S. 39.
- ⑫ H. Rose: *Life of Napoleon I*. Vol. II. p. 297.

五 漂流記から見たスタイン、アルントのロシア滞留とその同國に及ぼせる影響

アルントの露京ペテルブルグに居つたのは一八一二年八月から翌年一月まで約半年弱であるが、その間ドイツ精神の權化彼れスタイン男を助けて、ドイツ軍團の完成に努力し、これを根據として或はナポレオン配下のドイツ側に宣傳を試み、その結果、普露タウロッゲン協定の成立を見、或は遠く英瑞兩國との外交的折衝に直接又は間接の貢獻を奏し、ここに反ナポレオンの精神が鬱然と高潮し、遂に解放戦役の乾坤一擲の活劇を見るに至つた。

しかもこのロシア滯留間、スタイン、アルントの活動の及ぶところ、果して如何なる影響を同國に與へたであらうか。

既に述べたる如く亡命の客スタインのロシア廷に於ける勢力は絶大であつて、終始露帝アレクサンドル一世を動かしてナポレオン一世討滅の計を講じ、兼ねて普、露兩國を拘束せるチルジツト條約を廢棄し、結局は普を中心ドイツ統一の壯舉にまで進まふとした。換言すれば、反ナポレオンの精神と祖國愛の實現に堂々その歩武を進めんとしたのである。勿論アルントはその地位に於てスタインに比ぶべくもなかつたが、燃ゆるが如き祖國愛と熱烈なナポレオン討滅の精神はスタインに比べて決して劣れるやうなことはなかつた。かくて兩者はこれが目的を實現する爲、露帝を中心に反佛大同盟を組織せんとし、英・普・瑞の列強に説いてアレクサンドルの傘下に立たしめ、これと同時に熱狂的な反佛思想を露の全土に推し擴げた。勿論この種の運動がスタイン、アルントの擁護にかかる『ドイツ軍團』を中心たらしめたのは云ふまでもなく、彼等は同じ反佛思想に熱中せる露の内相シスコフ提督(Admiral Schischkow)と相議し、遍ねく、露の民衆を刺激してナポレオンに猛烈な抵抗を試ましめやうとし、これが檄文使用の文字につき、アルント、シスコフそれ／＼不熟なフランス語で、一語數時間間に渡つて會談を續けたとさへ言はれてゐる。かくて左なきだに政治上、經濟上、佛の痛烈な壓迫に苦むロシア人は今やこれが檄文に刺激されて、一般上流人は勿論小やかな市民、兵卒後備兵に至るま

で北より南より幾千と群むれをなして集まり來つたと、漂流記に記してある。アルントの如き熱情的文人の著述として多少の誇張はこれあるにせよ、大勢を窺ひ知ることは出来るであらう。

なほ漂流記②に傳へるところ、「ポロヂノの敗戦、モスコーの燒燼後、多數露人の恐怖と失望は大なるものあつたが、スタインは始終平然として動搖の色なく、宮中の饗宴に列しても泰然自若たる面色を示し、皇帝始め上流貴紳に毅然たる勇氣を附與せるものが多大であつた」云々。

さて序で乍らここに一言を費さざるべからざるは、「モスコー燒燼」(一八一二年九月十四日—十八日)についての考察である。これに就ては恩師、箕作元八博士が史學雜誌第十三編第十二號に、「千八百十二年モスクバ失火の原因に就て」なる考證を公にされ、その中にロシア人のガンチヨ・チェノツフが獨逸語で書いた「Wer hat Maskau im Jahre 1812 in Brand gesteckt?」なる論草を紹介され、これに博士一流の該博精緻なる考證を加へ、遍ねく史家の承認するところのモスコー總督ロストブチン伯(Graf Rostopschin)の放火命令説を否定され、事實、「一方はフランス人が亂暴し、一方はロシア人がヤケを起して、兩方共に火の元に注意せず、或は時に態と火を放ちたるより終に大火と成つたのである。」と推定せられてゐる。

併しここに注意すべきは漂流記の中に、「首都を燒燼に歸せしめたロストブチンの勝利の祭典」(Feststoppichins des Hauptstadteinäscherers Siegesteste)のロシア各地に行はれたことを記し、尙ほ「久し

からずして公報は報ずらく、ロストブチンはモスコを灰燼に歸せしめた。そしてナポレオンはクレムルに入り込んだ。」「—Nicht lange-so erklang die Botschaft, Rostopschin hat Moskau in Flammen aufgehen lassen und Napoleon ist in den Kremlin eingezogen.」云々と述べてゐるこれらの歴史事實である。ここに所謂「Botschaft」とは、勿論、「公報」の意味であつてロシア官邊では、ロストブチン放火説の可なり有力であつたのを想見せしめる。しかしボロヂノ戰役の如く當初、戰勝の報告せられて「御祭騒ぎ」を現出したにも係はらず、忽ちにして敗戦の真相が報告され、人々に失望落膽の感じを與へた實例もある。然るに漂浪記の全篇を通じ、その後には發せられた公報で何等如上のそれを否定すべきものの記載が無い。

なほアルントは既述の如く、皇帝アレクサンドル一世の顧問として、勢威露廷を傾けてゐるスタイン男に格段な親しみを有し、軍團創立のことについても日夕會談を交へてゐる。またスタインの紹介でロシアの貴顯特にオルロフ伯爵夫人などと交誼の厚かつたことも漂浪記に記して居り、且つ「スタインによつて諸處の宮殿がアルントに解放された。」「—durch ihn (stein) waren mir die Palläste geöffnet.」ことも述べてゐる。随てもしロストブチン放火説を修正するやうな公報が後からでも届いたなら、必ずアルントの聴くところとなつて漂浪記にこれらの記載が散見せねばならぬ筈である。然るにそのこれ無きを見れば、少くも一八一二年九月から翌年一月初旬まで約四ヶ月のロシア滞在間、ロス

トブチン放火の公報の修正されなかつた次第が了かる。かく考察し來れる時、箕作博士の論草に、「⁹大抵其頃にはモスクバを焼いたのはフランス人であるといふのが、當時のロシア人の輿論の様になつて居ります。」と云はれてゐるのは聊か再考の餘地があるやうにも考へられる。その上ドイツ生れの軍人で一八一五年義勇兵として自由解放戦役にプロシアの軍務に服したハインリヒ・バイツケのロシア戦役史 (Heinrich Beitzke: Geschichte des Russischen Krieges.) に述べおるやう「¹⁰フランス人は火炎を鎮めんと努めたが、人は消火器を得るに由なく目的を遂げなかつた。そは消火器がロストブチンの命令で遠けられてゐた爲である。」云々とあるに見れば、ロストブチン放火説に若干の根據を加へ得るやうに考へらる。箕作先生の論草に、「¹¹此人(アチスト)が命令を下して焼いたといふことは一つも據所がない。唯證據になることは斯う云ふ事があるのである。政府の小舟を集めて居る所を焼くことを命じ、又ブランドーを貯藏したる所を焼くことを命じた。是れは事實である。それが若し本當であれば命じたことがあるかも知れませぬが、實際に於てそれが後に焼けずに残つて居つた。」云々と云はれてゐるが、その史料となれるガンチヨ・チェノツフの著述を得るに由なく、これを論評することが出來ぬのは遺憾であり、なほ先生、物故せられて既に十幾年、その卓越せる教示に親しく接し得ざるを、深く遺憾とするところである。

最後にスタイン、アルントのロシア滞留が如何にロシアの社會狀勢に影響を及ぼしたか、勿論直接的

な効果はこれを求め得ぬにせよ、保守的停滯的なロシアの國狀に對し、何等か革新的な啓蒙的な一脈の光明を將來するやうなことは無かつたであらうか。今漂浪記に散見する二三の事柄を綜合して這般の消息を明かならしめやうと考へる。

抑もスタインの理念が自由的民族主義であつて、彼れのロシア滯留間主としてこの方針に基づき活動を續けたのは既述のところに徴して明かであるが、その所謂「自由」なるものも單なるナポレオンの世界統治に反抗せる「國民的自由」を意味する許で無く、爲政者の抑壓や舊慣弊習に縛られた一般民生の自由をも要求してゐるのは以下説くところによつても明かである。またアルントに於いても、『神』と『自由』は民族國家に不可缺な要素であるのは、既述のところに徴して明瞭であり、その所謂、自由なるものも、要するにスタインの場合と同じく諸國一般人民の自由幸福をも目的としてゐるのは以下に述べる彼れのロシアに於ける活動に徴して明かである。

元來露帝アレクサンドル一世の父ポール一世は、漂浪記の傳へるところ、東方的チュラニアン的特質に交ふるにヨーロッパ的の夫れを以てし、爲にその行爲が時として常規を逸するやうなことがあり剩へ、その幼時母なるカタリナ女帝がポールの身邊を氣遣ひて(カタリナ女帝はその夫たるピョートル三世を殺した關係上、復讐の手の世嗣ポール三世に及ぶを恐れ)常に怠らず衛兵に警戒させ、その結果いよ／＼帝の性向を怯懦猜疑へと導いて、帝は居常正式の王宮にも住まはず、ペテルブルグの中に所謂「螺旋宮」(Labyrinth)なるものを造らひ、日夕これに起臥

し、猜疑の心は狂的となり從臣に對する愛憎も畜ならず、政務の不公正は勿論であつた。かくてその局が一八〇一年ポール一世の弑殺なるロマーフ朝史上の一大悲劇を生んだのである。

このポール一世の後を嗣いたのが、その子アレクサンドル一世で帝はその父の弑殺に間接の關係あるを以て心が常に悩み、加ふるに神秘的信仰に心酔してナポレオン討滅の神恩を感ずること一段と深く、尙ほスウイス人ラ・ハルプ(La Harpe)の説に聞いてルソー主義にも親炙し、さてこそ罪責を免がれ神恩に報賽し民生の安寧を庶幾する意味から神聖同盟を發議したが、信仰に潜む保守反動の思想は、民生の安寧を希ふ神聖同盟をして、忽ち國民抑壓の機關たらしめるに至つた。なほアルント漂浪記には彼れが目撃せる帝の真相を描寫し、「うち見たるところ、帝は美はしき瘦形の體格で、その毛髮はブルONDに、その眼は灰色に、美はしき瀟洒たる風貌を備へてゐた。そして感情的な親しみある言葉はその相手の同情を唆らずには措かぬといふ有様であつたが、その優しき女性的な顔容の間に、何となく自負的な虚榮心の閃きあるを看過することが出来なかつた。」云々と記して居り、その自負的な虚榮心にも、保守反動思想の基くところがあつたやうに思はれる。

かくてロシアでは一面、ナポレオンに對する民族的自由の高調せられると同時に、他方、國內民衆の自由を壓迫して顧みるところがなかつた。試みに漂浪記^⑬の叙ぶるところを見るに、「露國の内相を勤め、正直の譽の高かつたスペランスキー(Speransky)、それからドイツ人で當時ロシアの樞密院に

列したベック (Beck) などは共に時事を憂へて、帝アレクサンドル一世に陳情書を捧げ、保守的政見を捨てて自由的改革を斷行せんことを勸奨し、共に帝の忌諱に觸れて、シベリアに流された。事情かくの如くであるから、日毎に白日の下捕吏が八方に飛び、夜は兵卒の助けを得て雪中に志士を驅るやうな有様であつた。隨て國民全般の自由即ちその安寧利福を念とせるスタイン、アルントの一派は憂愁憤悶に堪へ兼ねるやうなことがあり、漂浪記にも、『余⁽¹⁶⁾ (アル) はここペテルブルグで既にドイツに失はれ、ロシア國民に重んぜられる多くのものの存在するを見、且つこれを經驗した。しかし他方吾人の眼前に現はれ、吾人の心を傷ましめるものあるを見た。それが吾人の心に嘯いて「汝は久しくここに留まるべからず」といふ。余はここに到着せる當初の二週間にこの感想を得た。』云々といふて居り、一方反動的傾向の見るに堪へざるものと同時に、他方國民的自由を標榜してナポレオンに對抗するところにアルント一派の心を惹くものあつたのをほめかしてゐる。否なアルント等はロシアの反動的傾向を抑へて自由的國家に近づけ、露を中心とせる自由的國家の聯盟によつてナポレオンに對抗せんと策したことが了かる。

漂浪記の傳へるところ、「余⁽¹⁷⁾ (アルント) のペテルブルグに至るや、常にスタインに連れられ宮廷、貴紳の間に入出したが、スタインの行くところには、大臣あり、伯爵あり、男爵ありといふ工合で、しかも是等の交友間には何等階級や身分の相違を重要視すること無く、極めて自由に、腹藏無く、且つ

嬉しげに語り、且つ論じた。實に(この際)吾人は凡ゆるヨーロッパの奴隸制度(農奴)の廢止に關して論戰を闘はせた。その間ペテルブルグの當代の貴族鳥の歌ふたその音調が、凡らくまた他の鳥々の夫れをも誘ふに至つた。(Mian kämpfte ja für die Freiheit gegen die allgemeine europäische Sklaverei. Indessen der Ton, welchen der vornehmste Vogel des Tages in Petersburg sang, lockte und bestimmte auch wohl die Töne der andern Vögel.)更にスタインは(余を伴ひ)志を同じうせる廷臣の家にも出入し、余はその折、吾人の宮廷に於て耳語するをさへ許されぬ種々な大事を、祕密間牒の側聞をも懸念すること無きやう、公然と語り合ふを聞いて、吃驚したことも屢々であつた。「云々と述べて居り、スタインやアルントが屢々インシテリの貴顯の間に入出し、農奴廢止やその他社會革新の問題など極めて自由に討論し論難し、旁々反動的なロシアを抑へ、自由的國家に近づけやうとした努力の程も推想せられる。」

更にまた漂浪記の記述に徴すると、「ロシアの軍司令官アレクサンドル公爵の夫人はドイツ、ザクゼン・コーブルク家の出であつてアントニー公爵夫人(Herzogin Antonie)と呼ばれてゐたが、當時宇内に於ての最も典麗な貴女と稱せられ、祖國愛と自由主義てふドイツ的感情にも惠まれ、スタインや彼れの期望またその工作に對し、充分な感激を有してゐた。アントニー夫人は己が邸宅に屢々茶の會を開き大抵はスタイン、アルントを始め、身分高からざる平民階級(Plebeier)特に學者や教授、ドイツ生れ

の侍醫トリニウス (Trinius) などが來會し、時には御微服の皇后エリザベス(アレクサンドル一世の後)まで臨御され公爵夫人自ら、「ピアノ」を彈奏して座輿を添へられ、さては最も自由な會談、最も自由な英獨佛政治歌の合唱など、宛然、フランスのサロンに見るがやうであつた。「云々と記して居り、いはゆる社會の各層を網羅せるこの政治的俱樂部では、必ずや社會各方面の革新殊に既述の「農奴廢止」なども論議されたやうに思はれ、この點に關するスタイン、アルント等の卓越せる議論も傾聽せられたやうに考へられる。

なほアントニイ公爵夫人に次いでロシアの啓蒙運動に少なからざる努力を拂ふたのは、オルロフ伯爵夫人 (Gräfin Orloff) である。夫人はロシアの皇室に血縁の關係あるゾルチコフ家 (Soltykows) の出であり、スタイン等と同じく國民的自由將た社會的自由を高唱して、社會の革正を絶叫し、ナポレオンの世界統治に眞向から反對し、スタインの如きも^⑩斯かる婦人がロシアに生き且つここに死なねばならぬといふことは氣の毒の至りである。」と述懐するに至つた。スタイン及びアルントは時折々オルロフ伯爵夫人を訪れ、「現下^⑪の諸問題について腹藏無き會談を交へ、戦争及びその結果、ロシア國民の勇氣と愛國心について感想を語り、更にロシアの行財政の缺陷、官僚將た士官將軍をすら風靡せる賄賂の弊習、貴族社會に鬱積せる陰險卑屈の風習についても忌憚なき論評を行ふた。」云々と云ふことが漂浪記の一節に現はれて居り、ロシア人各自の自主獨立と自由主義の確立を高唱するに至つたのが了かる。

なほオルロフ家の結構について漂浪記の著者は次の如き叙述を試み、「オルロフ家の邸宅は宏壯な堂々たる建築で、その背後は平行せる長き廣き二階の建造をなし、その中に多數の熟練せる靴工・仕立屋・錠前屋等を住まはせ、これより良々上等の間には學問藝術の各専門家、假令ば、男女各科に涉れる家庭教師(Utschitel)、雄辯家、舞踊師、劍客さては畫家・彫刻家等をも住まはせ居り、ここでは獨・佛・伊・露等各國語が雜然混然と行はれ、彼れら所屬の民族も各種各様であつたやうに考へられ、食事の時になればこれ等多數の人々が一時に大なる食卓の夫々定め場所に着くことを普通となし、その上オルロフ夫人には實子として一人もなかつた爲か、ロシア全土から色々な種族例へばキルギス人、カルムツク人、タタール人等所謂人種の標本ともいふべき多數男女の兒童を驅り集め、その衣類履物等もなるべく各民族特有のものを用ひさせ、上の各技術師共々、同じ食卓の一定の場所に着席させるのを常とした。

さてこれら各民族の子供であるが、その中女子であつて容貌美はしく言語も巧に音樂なども上手なものは、行く／＼取り立てて伯爵夫人や他の貴族夫人にも昇格させるを常となし、また男の子供であつて、同じく容顏美はしく風采も確つかりしてゐるやうの場合には、後に取り立てて將軍にも登用する。」云々と述べて居り、いはゆる十九世紀初頭に於けるロシア貴族生活の一斑を髣髴たらしめてゐる。勿論これら豪奢の生活は貴族の私有せる廣大な領地、將た多數農奴の奉仕せる勞力の結果ではあ

らうが、その人種の區別を論せず、雜然たる教養を施し、才幹によつては大臣宰相にでも登用するといふ一種の平等主義自由主義の面影を備へてゐる。

しかし既述のやうにスタインやアルントは如上農奴酷使の弊習の如き、即時これを撤廢する要ありと斷じ、尙ほ自由主義の外容を備へた異民族登用の如き、實は毛色の變はつた美はしきものを愛翫するといふ、例せばカタリナ女帝の思寵を擅にしたポーランド貴族ポテムキン(Potemkin)の如きであると斷じ、更にオルロフ家の家庭制度の如く、各種各民族を平等に教養し、その中異數のものを擢んで高位高官に登用するといふのは、その實、公平でも自由でも何でもなく異民族相互の美點を以て相互感化し合ふより寧ろ、互にその弊習を以て同化し合ひ訓養・秩序・道義の精神を滅却して憚らざるものであると斷じ、この事こそ眞に公正自由の被へを着けた不正非自由であると論究してゐる。

兎もあれ、スタイン、アルント一派が自由主義を高調して、頑迷固陋な反動的ロシアを啓蒙し、眞の自由的國家を創建して、斯かるロシアを中心とした民族國家の聯盟を大成し、良がてナポレオンの世界統治の政策に反抗せんとした努力の跡を充分に認めることが出来る。

勿論これら自由主義の唱導が果して幾何の程度に於てロシアの將來に幸したかは疑問である。しかし、四十八年後、アレクサンドル二世の治世に行はれた農奴解放の如きが、必しもアルント、スタイン等の自由主義にその端を發せぬとは、誰人か敢へて斷じ得るものがあるであらう。」

(註)

- ① Arndt: Meine Wanderungen und Wandelungen —, S. 56.
 ② Ditto. S. 87.
 ③ 史學雜誌第十三編第十二號、一二二八頁
 ④ Arndt: Meine Wanderungen und Wandelungen —, p. 3.
 ⑤ Ditto. S. 85.
 ⑥ Ditto. S. 85.
 ⑦ Ditto. S. 73.
 ⑧ Ditto. S. 66.
 ⑨ 史學雜誌第十三編第十二號、一二二六頁
 ⑩ Heinrich Beitzke: Geschichte des Russischen Krieges, Vorwort. S. 5.
 ⑪ Ditto. S. 304.
 ⑫ 史學雜誌第十三編第十二號、一二二三頁
 ⑬ Arndt: Meine Wanderungen u. Wandelungen —, S. 21.
 ⑭ Ditto. S. 89.
 ⑮ Ditto. S. 53—S. 55.
 ⑯ Ditto. S. 52.
 ⑰ Ditto. S. 40.
 ⑱ Ditto. S. 67—S. 69.
 ⑲ Ditto. S. 73.

②⑨ Ditto. S. 74.

③① Ditto. S. 77—S. 78.

③② Ditto. S. 78.

③③ Ditto. S. 78.

六 結 び

一時全歐に勢威を振つたナポレオン一世の運命は一八一二年ロシア遠征の失敗にその端を發して漸次、沈衰の一路を辿るに至つた。しかも彼れの勢力に徹底的の崩壞を齎らすに至つたのは一八一三年の「ヨーロッパ解放戦役」である。そしてこの解放戦役の端が、露帝アレクサンドル一世の活動に始まるは遍ねく史家の論ずるところであるが、これが活動に刺激を與へ激勵を加へたのは果して何人の功に歸すべきであらうか。

歐洲聯盟の中樞として反ナポレオンの活動に猛進したウィリアム・ピット死して既に七ケ年、ドイツの偉人スタイン男を除いてはこれに代るべき人才としては無い。幸ひスタインはプロシアを追はれてロシア廷にあり、志を同じうせるアルントまたプロシアを出でてロシアに走り、共に露帝を刺激して解放戦役の準備工作に向はせた。ロシア革命後、帝政時代の史書次第に散逸してこの間の消息を明かにするに足らず。ベルツの傑者 *Aus Stein's Leben* またこの際の史實を傳ふるに遺憾なしと云ふ譯には行かぬ。嘗々獨りアルントの漂浪記の存するものがあり、假令一八五八年彼れの死歿の二年前に編ま

れたものとは言へ、彼れのロシア滞在中目撃するところを舊誌と記憶に徴し、眞率にしかも明快に叙述し、他の當時の正確な傍證的史料に比較して殆どその真相を誤らざるやうな感がある。

従て「アルント漂浪記」なる覺書は如上の史實を闡明する上に、殆ど唯一絶對的なる史料的价值を有する。

吾人は以上述べ來つたやう、これが史料によつてスタイン、アルント等が如何にアレクサンドル帝を援けてナポレオン討滅に邁進せしめるに至つたか、また彼等の努力せる『ドイツ軍團』の創立を契機とし、更に露帝からの援助と相俟つて、プロシア廷を動かし、プロシアの軍隊を激勵し、以てタウロツゲン協定へと導き、更にドイツ軍團を中心に英國を説き、瑞國を誘ひ、奥國をも動かし、解放戦役の一大壯舉に猛進せしめるに至つたかを推考し得る。況んやアルント等のドイツ軍團中心の活動が如何に露の國民的自由の覺醒を促し、ナポレオンの世界統治の期望に一大障害を興へたか、また如何に露の弊竇とも云ふべき反動保守の弊風を摘抉して眞の自由主義に激勵を興へ、ここに自由的民族國家の聯盟を造つてナポレオンの世界主義に恢復すべからざる打撃を加へようとしたかは、この徴々たるアルント漂浪記に俟つて始めて闡明しうるもの極めて多大なるを感するのである。」(完)